

街の灯が見ていた

矢崎 泰久

〈話の特集編集長〉

え・小西保文



仕事が終わって、食事に行こうか、ということになった。かなり遅い時間だったが、出演者に若い女性が数人混っていたせいか、ふだんは早く帰りがたがるテレビのスタッフたちも、ほとんど参加した。十二、三人はいただろうか。ステータキを食べてから、三の宮のピアノ・バーへ入った。

不思議なもので、いつもならパツと散ってしまいう人間同士が、急に別れ難くなって、午前二時くらいまで、とりとめのない話をしながら時を過していた。それでも、まだ十九歳だという女性タレントが、そろそろ帰らないと家で叱られるといい出して、それをシオに全員がハジかれるように外へ出た。

叱られるといった若い娘が、タクシーに乗り込むとき、私に一枚の紙片をそつと手渡した。「あとで見てノ」祈るようなまなざしであった。私は、誰にも気取られぬように、す早く紙片を懐中に収めたのだった。

ホテルへ戻ってから読んでみると、それには、その女のテレフォン・ナンバーが書いてあって、

小さな字で《ご相談したいことがあります。必ず明日電話してください》とあった。その日、和服姿でテレビカメラの前に立っていた彼女は、ひときわ私の眼を引いた。どこといって、取り立てていうほどの美しさを持っているわけではないのだが、バランスが保たれていて、着物がかえって体の線をナマナマしく際立たせて、独特なエロティシズムを感じさせた。熟れる寸前の果実のようであった。

十日経って神戸を訪れた私は、彼女に会う時間を計算に入れてスケジュールを組んでいた。待ち合せたホテルのバーで、彼女はオン・ザ・ロックを立てつづけにあおるようにして飲んだ。「相談て何なの」と私がうながしても、彼女はなかなか口を開こうとはしなかった。急に飲んだせいか、かなり早く酔いが回ったらしく、舌のからむような話し方で「お部屋へ連れてって、ね、いいでしょう」という。あいにくシングルの部屋なので、夜、女性の客を入れることは、かなり不作法である。それを承知で連れて行くには、このホテルで

私は知られすぎている。

私が腰を据えているので、彼女は、更に二杯グラスをあけた。「あのね、わたしの恋人はね、恋人いうとちょっとカッコいいけどな、ま、許婚者いうんや。彼は収入あんまりないんやけど、すごいヤキモチやきなんよ。うち、困っちゃう。」突然、妙なことをいう。

「ふーん」と軽く合槌を打つ。

「もっと真剣に聞いてくださいな。毎晩電話かけてきよって、うちが家に居らんと、どんなに遅くても電話よこせて、必ず待ってて、グズグズいうんよ。悪いことしてないのに、男ができたのか、とか、どこで何しとったか、根堀り葉堀り聞きよる、もうすぐに不愉快になってしもて、作り話して、本当に心配させてやるんや。すると、彼、子供みたいになって、尻が軽いとか、浮気女だとか、東京にわたしを呼ぶほどの能力ないのに、いやになる……。男のシットって醜いから、わたしつい酔っぱらって、もう電話では口から出まかせいつてるだけ。ね、どうしたらいいの。東京の人って皆んなあんなんか」

こんな相談は、それこそ生まれてはじめて受けた。一応、シット深い恋人を持っているが、どうしたらいいかというふうにも受け取れるが、話の調子からは、いわゆるオノロケである。それが更にハッキリしたのは、会うととてもやさしい男で、自分のことを世界中の誰よりも深く愛している、まだ二十三歳であり収入もないのに一年間貯金して、小さいけど本物のダイヤモンドを買ってくれたなどというのを口走るのであった。

しばらくは同じような非論理的な話をダラダラとしている。私はすっかりシラケていて、電話を

かけるため席を立った。五分ほどして戻って見ると彼女の姿はなかった。私の部屋のキイもテーブルの上にはなかった。彼女が部屋へ行ったことはほぼ見当がついたが、私はどうにも古風なところがあって、いわゆる据膳は苦手である。しかも、好きな男がいる場合は、最後のところで「それだけは勘忍して」などと、予想外の拒否に会うことだってあるのだ。

かなり時間をかけて、私は部屋へ戻った。ノックしたが返事がなかった。ドアのところに立っていると、女の話す声が中から聞えてくる。再びノックすると、ドアがスッと開いた。全裸で彼女が立っていた。唇に指を一本あてて、黙っていてほしいという合図をするのだった。彼女は私の手を引いてベッドのところへ戻った。外れたままの受話器を手にとると、「かんにんね、ちよつと物音がしたんで見に行ったんよ。うち、あんたのことしか考えてないんよ、信じてほしい……」電話の相手は予想がついた。そのことより驚ろいたのは、彼女は私の手を、自分の体の敏感な部分に導いて愛撫するように求めているのであった。しなやかなみずみずしい姿態は、私に激しいウズキを与えないでは置かなかった。ホテルの開かれた窓からは、街の灯が見えていた。すべての室内の照明は輝やきながら、彼女の肌を隅々まで照らしている。

「あなただけよ。好きよ。今すぐ会いたいわ……」私を迎え入れながら、彼女は受話器をしっかりと握りしめていた。

「ああ、街の灯が今夜もとてもきれい」しほるような声で彼女は空いている手を私の背に回して、最終点に達しようとしているのだった。

神戸—東京

武家育ちと メリケン育ち

淀川 長治

〈映画評論家〉

ぜいたくを説明つきでぜいたくをするのが東京。ぜいたくを説明ぬきでぜいたくするのが神戸。そう思えて神戸が好きなのは私が神戸生れのせいかもしれない。

説明が嫌い。見たらわかる。感じたらわかる。

これが神戸のように思う。

だから日本じゅうで一番「講演」を聞きたがらないのが神戸であった。

私はその神戸で育ちその神戸で生れて初めて映画館で講演のまねごとをやってヤジリ倒された。

私が講演に、その「話し方」を学んだのは神戸のおかげであった。

東京ではボソボソとわかりきったことをアクビをするほどのスローテンポでしゃべっても聞き手は我慢するが神戸では張り倒されかねぬ。

神戸は遊ぶところで東京は勉強するところ。神

戸は金を使わないで遊べるところ。東京は金を使って勉強（学問）するところ。そんな印象がいまだにこびりつく。

東京に居ついたのは今からもう三十五年も前なのに、いまだに私は「神戸っ子」である。東京を私は神戸にいたときから尊敬していたのに、東京人になりたがらない。

個性の点で神戸ほど頑固なところは他にはないと思う。人と逢ってすぐわかるのは関西人と東京っ子の違いだが、その関西人の中でもとくに『あんな、やっぱり神戸か』と神戸っ子はその個性が鮮やかだ。

東京に初めて居ついたころは、その東京人のお行儀の良さにほとほとあきれた次第である。その私が何年かぶりで神戸にかえって一番最初にあきれたてたのがお行儀の悪さであった。しかしその

お行儀の悪さは「無駄のない」お行儀の悪さといいたお行儀の悪さ。つまり「おていさい」抜き。神戸っ子ほど「ていさい」をかまわぬ人間も日本じゅうにはいい。東京ほど「ていさい」をかまう人間も日本じゅうにはいい。

それはどこから来ているのであろうかと考えるまでもなく、東京の「江戸」と神戸の「ハイカラ」すなわち武家育ちとメリケン育ちのちがいであろう。つまりは「サムライ」と「ハロウ」、ハウ・アー・ユー」の違いである。

もう今はその差がちまったが、大正の末から昭和の初めに、東京を訪れてビックリしたことは女性の洋服の点だった。その洋服は神戸っ子の目からは見られたシロモノではなかった。ところが東京の日本服（キモノ）となるとくにく下駄ぞうりからおびはかまへこおびにその日本の美その色彩感覚は見とれてあとをつけたいくらいの美しさいきさであった。

けれども、その神戸とその東京がびたりと気を合わせる一点がある。それは「おつちよこちよい」だ。

東京は「サムライ」の大都市の裏がわに、「江戸」のいなせな肌を持つ。そのいなせを神戸は神戸流の西洋文明の中から染め上げてきた。格式張ったことが嫌いなのである。東京の「江戸」はお武家の格式の反抗がお武家の意気をついだまま「いなせ」というもので開花したが、神戸は初めっからバタアでいためた「いなせ」を身につけてそのざくばらんが「神戸っ子」の個性となった。この「いき」なことが大衆にしみこんで生れたのが「東京のおつちよこちよい」だと思う。

だから私はよく神戸っ子のことを「関西の江戸

っ子」と称して説明した。

私が初めてニューヨークに行ったとき、ここは東京をつくりだと思った。私が初めてシカゴへ行ったとき、ここは大阪をつくりだと思った。そして私が初めてロサンジェルスハリウッドに行ったときここは神戸をつくりだと思った。山の近い海の近いロサンジェルスの明るさは神戸をつくりで、神戸の夜景を六甲から見るとまさにロサンジェルスそのままに見えた。

それで東京は学問する都市、働く都市。神戸は遊ぶ都市、別荘の都市、そうも思えたものの神戸ぜんたいが別荘の都市とするとずいぶん柄の悪い部分を持った別荘地帯である。キャグニイはニューヨーク生れだが神戸っ子をつくりで私は好きだ。柄が悪いのに愛きょうというか人好き一〇〇パーセントだからである。アーサー・オコンネルとかトーマス・ミッチェルはニューヨーク生れだがやはりまさにニューヨークっ子らしい。妙なたとえをとったが神戸と東京その二つのきわだった個性を私は尊重するし個性のあるということはとても文化的で好きである。



よむがわ
ながはる
淀川 長治

神戸生れ。神戸三中出身。「映画の友」編集長として長く活躍。TV日曜映画劇場のニギニギおじさんとして今も長期的な人気を保ち、本誌には創刊以来の執筆者。

□エッセイ特集〈2〉

神戸—東京

神戸の味だけは 帰らなくて

高島 忠夫
〈俳 優〉

東京に住んでてなつかしい神戸について語るとなると、先ず一番に浮んで来るのは新幹線の「神戸駅」です。私は飛行機が大嫌いで地面に足がしっかきついている乗物しかのらないので、日本全国いたる所をいわゆる汽車で廻っていますが、「新神戸駅」程美しい駅は知りません。石屋川から將軍通りを来て坂の下から駅を見上げる時、いつも如何にも神戸にふさわしい景観だなとうれしくなります。然し新幹線も全国各地にのびる事になりヒョッとすると「新神戸駅」を抜く美しい駅が出来るかなとチョッピリ心配と、又更に美しい駅が見られる喜び……それがゴッチャになりました。ワテほんまに面白いわんワ……といったトコロです。

さて私の生地は正確には神戸市御影町（旧町名）です。この「御影」という町名の由来ですが第十四代仲哀天皇と第十五代応神天皇の間に位置

づけされておりますオキナガタラシヒメの神功皇后がこの地方に行啓遊ばした時、コンコンと湧き出でる泉の面に御影をうつして髪をくしけづられたところから「オンカゲ」……「御影」となったという由緒深い町名なのです。ところが……この「神功皇后」という方が実在されない、つまり神話上の名前であるというのを或る歴史の本で読みガッカリいたしました。「神功皇后」を信じてた頃は「神戸」という地名だって「神様の戸」ですから何かいわれがあると思ってたのですが……神戸の由来を御存知の方は御教示下さい。それから、六甲山ですが……これ又神功皇后が六つの甲を埋めたところからの説を信じてまして少年時代六甲山のどこかにその「六つの甲」が埋められているのではないか……そしていつか研究してそれを掘りおこして、あのドイツ人で少年時代ホメロ

スの詩を読んで感激し更にこれは架空の物語ではないと信じ遂にトロイの存在を証明しギリシャ文明に先行するエーゲ文明の存在を明らかにしたシュリーマンみたいな事をやろうなんて夢物語を持った事もあるのですがこれ又夢破れたりです。なんでも「六甲」は「武蔵」と同じ様にはじめは「六甲」と呼んだつまり「ムコー」のあて字だったらしいのですネ。説明が逆になりましたが、昔、難波の地から「むこう」の方に見えたのであそこを山つまり「むこうの山」……それに「六甲」とつけたのが「六甲」となったという話でこれ又ガツカリ……それじゃ箱根の山にある「芦の湖」も山から見下すと「足の方」に見えるので「アシノコ」……「芦の湖」になったのかと駄じゃれのひとつも言いたくなります。いや別にこれでどうのこの文句を言うつもりはありませんが矢張り故郷の地には何か歴史的な由来が欲しい気持ちがありました……。ついでながら私共の「高島」という性ですが琵琶湖の西岸に「高島郡高島村」という地があつてそこから神戸へ出て来て「高島村の何兵衛」なんていつてたのが高島家になつたらいいですネ。先日百貨店の高島屋の飯田社長とお話してましたら「高島屋」の由来は矢張り高島郡高島村から飯田さんの御先祖が出てこれられ呉服屋さんを出す時に忘れ得ぬなつかしい父祖の地「高島」をとって「高島屋」とされたのを伺いヤッパリ古えより人々は故郷忘れ難く御座候だったのだなアと感じいました。

なんだか東京から故郷神戸を見て感じる事というテーマから外れてしまいました、私も家内も時々話し合うのに二人共年をとり、子供達も大人になつて離れ離れになつた時神戸へ帰ろうという

話があります。それも山腹のそして神戸市が見える御影の山の方の地がいいという事になり土地を探したら余りの高さに腰を抜かし「土地の値段はミカケ（御影）によらない」とて止めた次第。その頃迄に金を貯めてマンションでも買う事にしました。

これは未来の話ですが現実に神戸へ帰ろうと決心もなかった事がありました。それは例の「関東大地震」間近くなんていう説が出て来た頃一家をあげて神戸へ帰ろう……仕事だつてサンテレビはあるし大阪へ行けば梅田コマも各テレビ局もあるしと生活設計もし皆に相談したら「今だつて東京から離れてアチコチへ行つてるじゃないか……神戸へ帰つて後たまたま上京した時関東大地震にぶつかったら笑われるぞ!!……人間すべて運命のままに生きて行くしか……」なんて事をいわれ今だに時々揺れる東京に住んでいます。しかし「故郷は遠くにありて想うもの」……三木のり平さんではありませんが私も東京にいて神戸をなつかしんでるのが一番かもしれません。

でも神戸の味……関西の味だけは帰らなくては……「宝塚いさ美」のきざみうどん、青辰のあなご寿司、いかなごの佃煮（これは母の味）甲南漬……これは東京にも出てるけど何故か新在家の本店で買わないとダメ等々……ああよだれが出て来ました。



高島 忠夫
たかし ただお

神戸生れ。関学卒。新東宝、東宝で映画活動。現在は音楽、演劇、TV、司会と多彩。

神戸—東京

白い道

秦 砂丘子

〈ニット・デザイナー〉

神戸の街ときかされると、どういいうわけか白昼の白い道を想い出す。

道は巾広く、山の手にもわかつてのびて行く。どうやら、トーア・ロードのはずれのようでもあるし、六甲の山すその道かなとも思われる。

不思議に建物や人物は見えてはこない。

白い道と透명한空気、振り返ると俯瞰できるであろう海を背中に強く感じている、切りとられたような情景なのである。

ある時、サンフランシスコで、やはり真ひるまノッブ丘から海を見下しながら坂道をくだっていた時だった。人っ子一人いないこの白い道のただなかで、なにか甘美な想い出が、突如それに重ねあわされて蘇ってきた。

泣きたいようなやさしさに包まれながら、ああこれは、私のなかにあるあの白い道とつながっているのだなと思ったものだ。

神戸というと私はそれを、三つの地域に分けて考えている。この山の手の人間味のうすい静かな

道と、世俗的な生活があふれた元町界隈や、ごみごみしたガード下、船乗りのいれずみに象徴される港街の男と女のいる夜の世界。

それぞれが人間の日常から生れたもののなのに、私は私の山の手の白い道に非日常をみる。時を越えた時間、日常の感覚からはずれた、一瞬とも永遠ともいいがたい、そんな時間を見るのである。

東京へ来て二〇年になる。したがって神戸の想い出は、この白い道に凝縮されて、私のなかに育ちまわってきた。

さて、時たま神戸の人と会ってみて驚ろくのだが、私自身が勝手に創ったイメージとは、非常に違いがあるのである。

まず形而上学的発想はない。現実的で生活にあふれている。ざっくばらんで、きどっていない。喜怒哀楽を自然に表現する。人間的執着心が旺盛だ。だから、おおよそ虚無的ではない。人間を信頼している。積極的で、活動的である。

これは門戸が海に向って開け、おだやかな風光周囲を包む美しい自然に愛されて育った人達にとっては当然なことだろうと思われる。

このタイブを、私は地中海人種のなかにもみるイタリア、フランス、スペイン、ポルトガル、それにアフリカの地中海沿海の国々の人達。豊潤な大地激しい太陽。自然が人間に沢山の恵みを与える所では、人々は、開放的で他人を信頼することができのではないだろうか。

東京といっても、様々であろう。私は二〇年、同じアパートに住んでいる。部屋の前には番号があるだけで、通称、囚人番号といっているが、氏名は書かない。隣部屋の人の顔も知らない。私は同じ所にずっと居すわっているが、時々、隣近所は住人が変わるのであろう。だれも気にとめない。人のことを割り切っている。同じビルなのに、隣は隣であって、一步部屋を出るとそこは、もうたち切られた別世界の話なのである。

ある時、どうしても夜おそくなのに薬を必要とした。仕方なく三田通りにある薬局に電話した。慶応大学のそば、東京下町。土着のおばさんが経営している。

「なんですか。人の迷惑を考えないんですか。もう従業員も帰ったし、私しや二階の寢床にいるんですよ。なに？　なにが欲しいって？　あるかないか、そんなことわかりやしませんよ。下へ行かなきゃ。本当に世話がやけるよ。まったく。」

だからね。下へ行って見てきますよ。受話器をそのままにして待つんですよ。」

「わかったかい。受話器はそのままにして待つん

ですよ」。

としつこくとなる。はじめの剣もほろろの言いぐさとは、打って変って熱っぽくどなっている。

あけくの果てには、裏の木戸を開いて夜のなかで、長い間私を待ち受けていてくれた。

ある時、魚屋で魚を買おうとしたら、おじさんが、

「だめだめ、これは止したがよいよ。新鮮じゃないんだから」。

こんな東京下町独得の暖ったかさは、今では本当に稀少価値である。私は時たま、そんなものとの出会う時、ぐうーと胸があつくなくて困ってしまう。

しかし人間というものは、贅沢なもので、暖ったかさが高じるとわずらわしくなってしまう。冷たさ一辺倒だと淋しいかぎりである。なんとかうまい具合にいかないものであろうか。

神戸と東京の人を思う時、私には、そんな感じがするのである。



はたすなこ
秦 砂丘子

一九三三年大阪に生れる。一九五六年神戸女学院大学文学部卒業。
一九六六年より年二回、秦砂丘子創作発表会を開催。その個性あふれる作品はファッション界の注目を集めている。
一九七〇年日本ファッション・エディタース賞受賞。

神戸―東京

どうしてことあらへん

やん

小曽根 実

〈ハモンド奏者〉

“どうってことあらへんやん”これが実際の所
東京と神戸の感想といえるかな？ ただ夜にな
と、距離を感じるナア。

飛行機は九時頃でオシマイやし、新幹線いうた
ら大体七時で神戸を通るヤツはオワリやろ！ そ
うなると、今からちょっと帰るか、いうてもそう
はいかんもんナ……。

ウツカリ最終便なんか乗りおくれてみいナ、エ
ライ目に逢うてまうもんナ。それでウツカリ公衆
電話かナンカ掛けてみいナ。これ又アホ程ようけ
の十円玉を持って、話をしもって十円玉を穴の中
へチンコロカンコロ入れて行かなあかん、これが
又恐しく、早いもんナ。ガチャッガチャ……話し
とる気にならへん！ そやからこの頃はこっちか
らはあんまりかけんようにしてもた。

そんな時には遠いなアと思うな。アメリカ方に



▶東京でのベストプレイヤーを集めてトリオを結成しました。このトリオ
で現在赤坂東急ホテル14階にて出演中（日曜を除く毎夕6時半～10時ま
で）ギター 潮見郁夫、ドラムス 植松良高

コレクト電話が出来たらエエのにナア。それやっ
たら毎日かけたるけどナ……。

こっちでハモンドオルガンを弾いとると毎日の
ように誰かが来てくれるんで全くアリガタイ。そ
の内半分は関西人やもんナ……。

エ？ ミー坊が出とんのか？ そんならちよつ
と顔でも見に行つたるか……てな具合かな？ 所
がやで大抵の奴が『お前どつかオモロイ所知つと
うやろ連れて行けや、オゴルサカイに！』と来るワ
ナ……。始めの内はヨッシャヨッシャと交際しと
ったんやけど、これが毎日みたいに一人一人にや

っとなんではこっちの身体がバテテまうがナ、向うは一晚やからエーけんどこっちは毎晩になるもんナ、でも来てくれたらつき合うでただし俺は払わへんど……。

東京の人は冷たいとか、隣の人が何をしとるか知らん、いうけどあれはウソやで、俺ん所の隣の夫婦、俺が東京で一人で居った時なんか、家族以上に世話してくれたもんナ。今も家族同志みたい夕食の作り合いなんかしてて……。

東京いう所は植民地みたいなもんやから結局日本人の性格で知らん人には話をしかけて行かへん引ッ込み思案があるんやろナ。そやから回りの人が何をしようとも知らんいう事になるんとチャウカナ? その変りウルソーのうてええがな。その反面神戸ちゅう所はウルサイなア、ホッポケちゅうんや!! 誰がどこで何してどないした、そんな話題しかないのかとウタガイとうなるな。そんな所やから東京で俺が町の中を買物籠引ッさげて歩いてとっても誰も振り向いてもくれんしな。気楽でエエ面もあるで。人間の性格によってやっぱりつき合う人も色々出てくるもんやナア。

やっぱり東京に居ると、外国人とのつき合いが増えるナ。神戸も外人は多いけど、これは殆ど在住の人間が多いやろ、シンチンタイシャが少ないワナ。東京はやっぱり首都だけあって必ず日本へ来た外人は通り抜けていきよるもんナ、そうなる色んな国の人と友人になれるし、又、音楽屋さんの中には居るし、勉強も出来るちゅうもんや、そのおかげでこないだアメリカへ三カ月程行つて来たんやけど費用がものすごい助かったで。向うの友人の家を泊り歩いてたおかげでな、これも東京に居らなかつたらそいつと逢えなかつたやろな。

何が幸いするもんやら判らんで……。

然し、東京の殺人ラッシュだけはカンニンや、関西もそうやけど朝だけやろ、東京は帰りもそうやもんナ。

或る時や、午後六時頃やったかな、赤坂から地下鉄丸の内線で新宿まで行つたもんや……、先ず乗れんがネ……。

ギョウギョウ駅員に押されて中へ入ったけど、次の駅で又、放り出され必死で入口にしがみついたけど……アカン……ノ……。

電車の中三メートル位奥に居つても放り出されてしまふもんな。それで二時間位かかって出勤してくる奴がヨウケ居るねんてヨ、東京の奴もようやるで……。



▲〈ロスアンゼルスのあるクラブにて〉
彼女は学校の先生でありながらシンガープレイヤーです。ここのクラブで演奏し、彼女はピアノとハモンドを両方演奏する素晴らしい音楽家です。私と意気投合し共演しましたところ、大喝采をうけました。

小曾根実 おぞね みのる

神戸生れ。関大卒。11PMにレギュラー出演イレブントリオとしてミー坊は大活躍。上京後は、神戸―東京を往復してハモンド奏者は多忙。新しいトリオも結成した。

□ エッセイ特集〈5〉

神戸—東京

東京のなかの神戸

武田 繁太郎

〈作家〉

私の住んでいる井の頭のとりの吉祥寺に、この夏T百貨店が開店して、神戸のUとかSとかYとかといった店が進出してきた。Tは渋谷に本店があり、ここにも前記の神戸の店がでている。私は、ジャケットやセーター類はU、ネクタイはM靴はYなどが好きなので、いままでは、渋谷の本店まででかけていた。だが、もうその必要はない吉祥寺へは散歩がてらによくでかけるので、そのたびに、Tによって、神戸の店をのぞいて歩くたのしみかふえた。

食べるほうでは、以前から、新宿のK百貨店に肉屋のNが店をだしていたので、新宿へでるたびに、このNで、神戸直送の牛肉を買うのがたのしみである。ドイツ菓子のJ、チョコレートM、シュークリームH、パンのDなどは、もうすっかり東京に定着していて、なかには、「なんだ。Dは神戸の店だったのか」

とDを東京の店だと思いついていた東京人が多い。アメリカあたりで、SONYをアメリカのメーカーだと思いついてるアメリカ人がいるのと同じにいる。

欲をいえば、ソーセージ屋のDだのパン屋のFだのがきてくれば、いうことなし、私はもう半分ぐらひは神戸に住んでいるようなものである。さらに欲をいえば、神戸のどこかの魚屋がきてくれば——いや、そういう願望はむなしすぎるのでやめておこう。

しかし、神戸に関しては楽しい話ばかりではない。時には、少々気の重くなるようなことにもぶつかる。

東京にいる中学の同窓が、在京同期生の会をひらくからと、案内状をくれた。返事をださずにいると、直接電話で勧誘してきた。あいにく留守をしていたら、再度の電話である。

私は、この種の会合にでるのが好きではない。中学を出てもう三十六、七年にもなる。在京者は二十人ぐらひいるようだが、同窓会名簿で名前をみても、顔も忘れてしまった連中がかなりいる。

案内をくれた同窓も、中学の五年間、おなじクラスになったこともなく、ほとんど言葉をかわした記憶もない。名前だけはおぼえていたが、顔もおぼろであり、要するに、五年間おなじ中学に学ん

でいたというだけの間柄である。他の在京者も同様である。

むろん、私にも、中学の先輩や後輩で親しくしていたものもいるが、残念ながら、そのほとんどが戦死したり病死したりして、現在東京には一人もない。これは淋しい。

正直いって、たがいに親しさも懐しさも感じていない連中と、ただ「同窓」だというだけで、おなじ酒席につらなることが、私にはどうにも気が重くてならぬのである。すでに四十年ちかく、それぞれにちがった人生を歩んできている。おそらく共通な話題も乏しく、一夜酒をくみかわしたところで、こちらは気づまりになるだけだろう。

二度も電話をかけてくれた同窓は、むろん、「同窓の誼み」からであつたろうが、生来偏狭な性格の私など、好きでもない酒を無理強いされたような思いである。

だが、こういう気持ちを相手にわかってもらうことはむづかしい。誤解されるのを覚悟で、私は正直に「出席したくない」からとことわると、案の定、相手はげんそうな声で電話を切った。「出席」するのも気が重いが、「ことわる」のも後味がわるい。始末のわるい話ではある。

こういう会合は、もともと、好きか嫌いかという「趣味」の問題だろうと思う。好きなものは、好きなもの同志で大いにやればいい。だが、だからといって、嫌いなものまで道連れにするのは、いささか独善的であり、友情だの好意だのの押し売りになるだろう。

どうももうつとうしい話になつてしまつたが、本来これは神戸そのものとはなんの関係もない話である。こんなことのあるなしかかわらず、やは

り、私は神戸が好きであつた。私が神戸が好きなのは、もしかしたら、神戸が自分の生れ故郷だということとも無関係であつたかも知れない。その好きな神戸に、ひとつだけお願いしたいことがある。

それは、もうこれ以上人口をふやしたり、街を大きくしたりしないでほしいということである。都会で快適な生活をたのしめる限度は、人口百万前後までだという。ちょうど神戸がその限界にきている。

さいきん、私はよく札幌にでかけていくが、目下、札幌は二百万都市を目指して、市街を拡大している。

道内の人口は五百万、内地からの移動人口などタカが知れているから、いずれは道内の人口の四割を札幌一都市で併呑してしまうことになる。

こういう「リトル・トーキョー」に、私はもうなんの魅力もおぼえない。賢明な神戸の市民たちに、私は、札幌の愚をくりかえしてほしくないのである。



ただだ
武田 繁太郎

神戸生れ。神戸三中、早稲田大卒。

「芦屋夫人」、本誌連載の「兵庫の女」などの著書がある。

ヨーロッパオリジナルをあなたのお手もとに



ハンロ (スイス) / カシミアコート

LADIE'S

San Sakae

MOTOMACHI-1 ☎ 331-7885

アカスキュータム (英) / ウールトレレンチコート

GENT'S

San Sakae

MOTOMACHI-2 ☎ 331-5121



74 神戸ファッションフェア
☆ FASHION BAZAR IN JAPAN みてある記

秋うらら 彩る雲は三色旗

10月5日から10日まで6日間にわたって東遊園地で行なわれたファッションパザール。もりだくさんの内容を一コマ一コマピックアップしてみと。

三色旗も鮮やかなファッションストリートは人、人、人でいっぱい、いいもの買わなくちゃ

★あの三色旗はなんなの？

赤白青の三色旗が神戸の街のあちこちに掲げられた時、何が始まるのかな？ と疑問に思われた方が多いと思いますが、あれがこのバザールのシンボルマーク。青い空、公園の緑に映える会場は、テントも三色に、舞台も三色に。

とんぼの型のステージを中心としたとんぼ広場、噴水公園はばんばん広場と名づけられ、広い会場設営を一手に受けてくださった兵庫デイスブレイ協会の皆さんの手際よろしく次々と設営される様は見ていてさすががプロと感心させられる。

10月5日。いよいよ、オープニング、一般公募したファッションメイツもそろいのトレーナーで勢ぞろい。百五〇人もの応募者の中から選ばれた彼女らはみんなかわい人ばかり。クイーン神戸の介添えて井尻助役がテープカット。市消防音楽隊と風船を手にもつメイツのパレードでバザールの幕あき。澄みきった青空のもとファッションバザールを祝う大砲のドーンが気もちよい。

★いいもの見つけた

ファッションストリート

メインゲートをくぐると、赤白青のテントがずらっと並んだファッションストリート。朝10時から



◀ワタシにあうのあるかしら？

▶アッあれを見よ、鳥だノ
ヒコキキだ、スーパーマンだ



▶「フオーク&フオーク」芝生のういっばいのヤング

◀「おい、これいいぞ」「どれどれ」

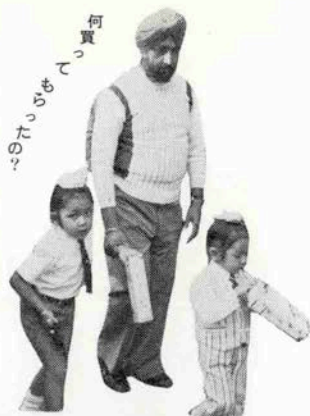




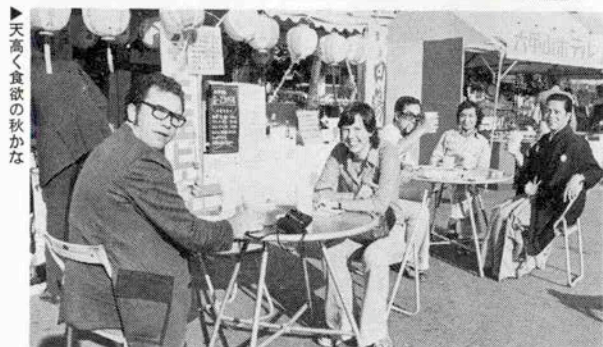
▲お嬢さんお足をどうぞ、これぞ手づくり、実演付き。



▲花市と華やかなレディたち



何買
って
ちも
だの？



▶天高く食欲の秋かな

夜7時までショッピングが楽しめるので家族づれや外人さんでいっぱい。どのお店をのぞいてもみんな欲しいものばかり。6日間もやっているから毎日通っているとお店の人とも顔みしりになったり最終日はずい分お値段が安くなってきましたよ。婦人服や子供服、ジーンズの店、紳士服、アクセサリーそして靴屋さん。靴屋さんといえば、その場で自分の足にあわせてつくってくれるコーナーが非常に好評でいつも人だかり。この道を通りぬけるとばんばん広場のうまいもとドリンクコーナーになる。バーベキューのいい匂いやお好み焼、アイスクリームや生ビールと、ショッピングを楽しんだ後はこの広場で休憩。

★神戸キャラクター発見のファッションショー

赤とんぼが飛び交う緑の芝生。「とんぼ広場」で開かれた連日のファッションショーは、バラエティに富んだもの。

5日は、浜野安宏氏構成・演出による「ザ・コウベ・キャラクター174」。神戸の街角で日頃みかける74人の神戸っ子が、そのまま自分の好みのファッションで現れる。さーすがコウベ。ソウルリズム

笑顔がきれいな▶

◀▼神戸のファミリーは絵になりますねえ



▶てました神戸名物エノチュー。ホントはこのアトが面白い



▶審査員のうれしそう
な顔をみてください
(ザ・コウベキヤラク
74)

のオリジナルで揃って踊るトリオ
チーム。アメリカンフットボール
選手のベアチーム。明治・大正・
昭和三代揃ったファミリー。中国
人のママと兄妹の子供。この冬の
ニットを着込んだ女性チームとか
74人が、奥田博之、山下礼子さん
らの司会で、ユーモラスに紹介さ
れ、日暮れまで賞を競った。

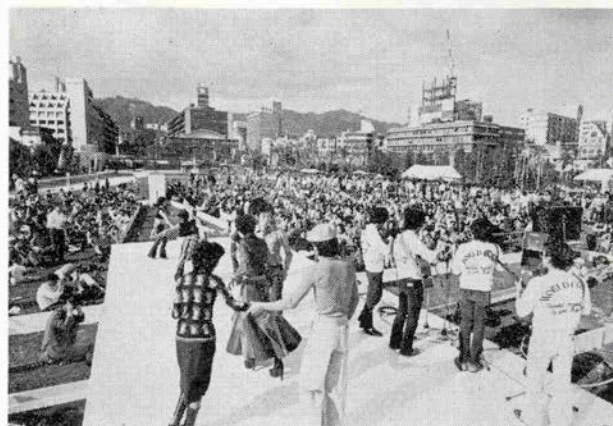
6日は日曜日。「ジーンズ・ファ
ッションショウ」メンズファッシ
ョンのリーダー石津謙介氏を迎え
て、ショウはストミシーパーイズ
のウェスタン演奏に合わせて健康
的に。今岡領子モダンダンスチー
ムも加ってこの冬のジーンズのさ
まざまが紹介された。ジーンズコ
ンテストでは、見事にはきこなし
ている外人の女の子、日本の古い
布をジーンズにとりいれたオリジ
ナルデザインのパア、エレガンス
にロングスカートを現われた女の
子、司会のパッチリNOWにジ
ーンを着こなした小山乃里子さん
等に賞が決ったのだ。カッコイイ。

7日は「フラワー&ニット」あ
でやかな大輪の花のオブジェ(太
田タマコチーム)を背景に、ニッ
トと花をテーマにデザインしたエ
レガンスなプリントドレスが次々
に。兵庫県生花商組合連合会の手
による。花のクイーンは、高さ2
米もある花の冠をのせて登場。

8日「アートファッション」は



◀トラのプロスラーしましまパンツ



▲ジーンズフェスティバル フィナーレはカントリーウエスタンのリズムにのって



◀さすがダンディ 石津謙介氏



▲オリジナリティは尊重しなくちゃ



◀イキイキノビノビスポーツファッション

雨で流れ、9日「30年代調華麗なるファッションショー」も雨のため、サンTVの中継録画予定はスタジオに移行されて録画どり。12日に放送された。

10日は体育の日にふさわしく、「ファミリースポーツファッション」でスポーティな神戸にふさわしい、テニス、ゴルフ、スキーなどのスポーツウエアとアフターウエアがK・F・Sの構成で青空の下、終るデイの最後を飾った。

★東遊園地、走って走って、笑って笑って、結婚式おめでとう

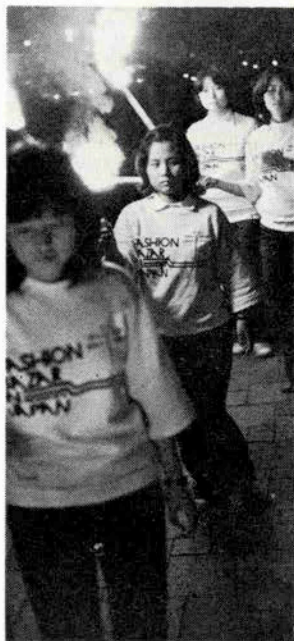
花市、朝市で一日があけ、とんぼ広場、ばんばん広場は家族づれ恋人どおしでいっぱい。6日青空のもと人生の門出をこのバザールでと、入江さんご夫妻、細山さんご夫妻の二組のカップルが挙式。クラシックカーでパレードする若い二人に広場に集まった人から祝福の声がかかる「お幸せに！」

ビールの早飲み、大福餅早喰い記録というオーソドックスなものからパンツの重ねばき記録というユニークなものまで総じて珍記録に挑戦。だれや、はくよりぬぐ方が得意なんていうのは。8日のアンティークオークションは元町美術の協力で。セリ市は活気があっていいですねえ。

神戸学院大学落研のメンバーの

▼ひさしぶりの運動会オトナたちのこのはりきりぶりを見て下さい

▼キャンドルの灯はゆれて、また来年！
(山手短大ワンダーフォーゲル部のお嬢さんたち)



ヨーイ、ドーン！



◀人間のあくなきフロンティア精神よ、とはオーバーな
(珍記録挑戦大会)



▲えーまいどおなじみ神戸学院大落語学院のめんめん

熱演によるばんばん寄席。毎夜の野外映画会など笑ったりメルヘンの世界にひたったり、そして最後のお楽しみ、10日体育の日どうせやるならでっかいことやろうよ運動会。「海岸通りのお化粧色」なんてね。みんな走ったりコロンドリ、ホント、でも楽しかったね。

★神戸の秋空に音と音と音が
ニューオリンズラスカルズのアンサンブルが神戸の空に響いたのが神戸っ子サウンドの開幕。

神戸出身の人気フォーク、ムッシュとアリスが若者を湧かせ、アビードロードほかのロックアンドロックの強烈なビートが夜空をたたき、学生コンボによるジャズアンドジャズが芝生のアベックたちのロマンチックなBGMとなる。夜空をこがす古谷充とザ・フレッシュメンのステージが雨のため中止になったのが惜しい。

最終日、ブルーグラス、ロックに続いて花屋敷バンドによって六日間の若者の音を結集して踊るファイナレ。強烈に燃えた六日間の神戸っ子サウンドは、この催しが神戸の街のファッション都市への小さな光となり、やがては大きな光の輪となるように、キャンドルの灯に燃え移って幕を閉じた。

また来年、ファッションバザールであいましよう。

もしベートーベンから
年賀状が来たら



年賀印は専門店で



神戸印判業組合

11月6日 〈ブランシェール〉オープン

この秋、神戸のまちかどに、新しくティールーム & ファンデーション専科が誕生しました。〈Blanchir〉。白くするというフランス語です。〈Blanchir〉のテーマは〈もうひとりのあなたとの出会い〉。ふだんは気づかない、まったく別のあなた——。そんなあなたと出会うところ、〈Blanchir〉。黒と白とで統一された〈Blanchir〉。今、あなたは、もうひとりのあなたをとりもどす。

ティールーム

あなたの人生が一ぱいの珈琲で変わるかも分らない……。ハードなビジネスのひとつとき、ゆったりとした〈Blanchir〉のスペースでくつろぐ。そんなとき、まちのざわめきが遠ざかり、〈もうひとりのあなたとの出会い〉が始まる…。もちろん、お客さまの接待や商談の場としても最適です。

8:30 a.m. ~ 8:00 p.m.
PHONE 391-4168

ファンデーション専科

トップメーカーのファンデーション、ランジェリーをとり揃えた〈Blanchir〉。専門のアドバイザーが、あなたのシルエットをひき立たせるため、相談をうけている。試着室で、あなたにフィットしたファンデーション、ランジェリーを身につけると、ミラーの向こうにいる〈もうひとりのあなたとの出会い〉が始まる……。

10:00 a.m. ~ 7:00 p.m.
PHONE 391-4167

ティールーム・ファンデーション専科

ブランシェール
Blanchir

神戸市生田区江戸町95 神戸市役所・花時計裏

